

目次

『平家物語』鑑賞の手引き……………	1
『平家物語』の三つの顔……………	4
歴史文学としてのアプローチ……………	6
①日付をマークせよ…6／②叙事的手法と物 語的手法…8／③物語の時間…12	
軍記物語としてのアプローチ……………	15
①いくさ語りのパターン…16／②装束描写と 名乗り…17／③勇壮さとあわれさ…20	
語りものとしてのアプローチ……………	22
①音読のすすめ…23／②韻律と転調のおもしろさ…25／③言葉の感触を大切に…28／④反復表現への着目…32	

盛者必衰のことわり——「祇園精舎」……………36

美しい書き出しの一節…36／祇園精舎の鐘の 故事…37／無常偈の意味するもの…40／鐘の 功德…42／釈尊入滅の奇跡…44／盛者必衰の 先例…47／六波羅の入道…49／巧妙な導入の 手法…50／釈尊故事の意味するもの…53／盛 者必衰のことわり…55／因果応報の観念… 56／心も詞もおよばれぬ巨人清盛…57／貴種 としての系譜…61／系図のトリック…63	
---	--

武人忠盛の深謀——「殿上の闇討」……………65

得長寿院の建立…66／忠盛の昇殿…67／忠盛 闇討のたくらみ…68／忠盛の深謀遠慮…70／ 郎等家貞の潜入…72／饗宴でのはずかしめ… 76／忠盛と家貞…79／饗宴での歌謡…80／黒 帥と播磨米…83／さまざまな事例…85／殿上 人の訴え…88／忠盛の弁明…89／劇的な構成	
--	--

のおもしろさ……91

物語の舞台 清涼殿と紫宸殿……93

平家打倒の陰謀——「鹿の谷」……………97

- 反平家の動き……99／石清水八幡の靈異……100／
 新大納言成親の野望……102／賀茂神社の神託……
 105／平家、左右の大將を独占……110／徳大寺実
 定の落胆……111／新大納言成親の怒り……112／成
 親と実定の対応の違い……113／鹿の谷山荘の密
 会……117／鹿の谷謀議の虚実……119／遊宴の猿樂
 ……120／陰謀の一味の名寄せ……122

物語の舞台 鹿の谷……124

謀反発覚——「西光が斬られ」……………126

- 多田藏人行綱の裏切り……129／摂津源氏の一族
 ……130／行綱密告……133／大野に火を放ちたる心
 地……137／行綱密告の史実……138／卑劣な密告者
 心理……139／軍兵召集……140／院の庁への申し入

首謀者成親の死——「新大納言死去」……………170

- 鬼界が島のありさま……171／新大納言の出家……
 174／北の方の願い……177／有木の別所に成親を
 訪う……180／信俊との別れ……185／新大納言の最
 期……187／北の方の出家……189

物語の舞台 西八条……168

孤島の悲劇——「足摺」……………191

- 赦免使上陸……193／流人俊寛の視点から……197／
 不信第一の人……199／赦免状の文面……201／信じ
 がたい悲運……202／ゆかりの者たちの文……204／

残される者と帰る者：206／冷静な成経の対応
 ……208／卓越した心理描写：210／捨てられる俊
 寛：213／腰になり、脇になり：214／狂乱の足
 摺り：216／この物語のみどころ：218／捨て切
 れぬ生への執着：221

物語の舞台 鬼界が島：224

丹波少将の帰還——「少将都帰」……………227

父成親の配所を訪う：228／往生への望み：
 230／父恋いの物語：232／成親の墓を訪う：
 234／行道供養：237／州浜殿を訪ねる：241／都
 入り：245／一業所感の身：247／家族との再会
 ……249／康頼のその後：254

物語の舞台 有木の別所：256

流人俊寛の末路——「有王が島下り」……………259

「足摺」物語の投影：259／有王の役割：260／
 出会いと別れの物語：261／語りの前口上：

263／有王登場：264／島下りへの決意：266／渡
 航の苦難：269／鬼界が島のありさま：270／島
 人との問答：272／探索難航：273／異形者の出
 現：275／有王の錯覚：277／主従の邂逅：279／
 夢幻茫茫：282／俊寛の語り：283／俊寛のすみ
 か：286／信施無慚の罪：287／有王の語り：
 291／俊寛の妻子の運命：292／姫君の手紙：
 294／愛児喪失の歎き：297／絶望の淵から：
 299／俊寛の死：301／葬送：302／姫君への報告
 ……305／廻国の聖として：306

物語の舞台 法勝寺跡：308

付録

皇室平氏・源氏系図……………314

京都略図……………316

掲載資料一覧

舎衛城と祇園精舎跡・遺跡にみる仏陀の生涯・祇園精舎跡：38／施
 身聞偈本生図：42／沙羅の花：45／涅槃図：46／涅槃図の絵解き：

- 54／伝清盛像：58／日給の簡：62／平忠盛：67／弦袋・鞘巻：71／
 着込め装束の衛府の侍：72／清涼殿図：73／現京都御所の紫宸殿・
 紫宸殿略図：77／京都御所復元図：93／紫宸殿・清涼殿付近図：94／
 石清水八幡宮：100／電火で燃える賀茂社の宝殿：104／吒幾爾：107／
 瓶子倒る：114／瓶子：116／鹿の谷への道：124／鹿の谷略地図：125／
 密告する行綱：133／中門と中門の廊：134／成親捕わる：147／寝
 殿造りの邸宅：148／六波羅邸に居並ぶ平家の軍兵たち：149／西光処
 刑地：151／歌舞伎の西光：153／西八条跡と伝える若一王子社：168／
 若一神社略地図：169／雲林院：177／有木の別所・吉備の中山：181／
 文袋：195／礼紙：196／足摺石：215／足摺する俊寛：216／「俊寛」の
 能面：220／硫黄島（鬼界が島）地図：224／俊寛像除幕式：226／成親
 の墓：234／行道念仏：237／釘貫門：238／鳥羽殿復元図：241／六波羅
 周辺地図：250／平康頼の墓：252／新大納言成親の墓・有木の別所周
 辺地図：257／硫黄島：270／餓鬼：278／俊寛像の復元：279／棟門・平
 門：288／俊寛邸址と伝えられる満願寺：291／法勝寺の薬師如来像：309／
 満願寺・法勝寺付近地図・法勝寺の復元模型図：311

『平家物語』鑑賞の手引き

人間の知恵、それは人生の経験をかみしめて得たもの、と言ってもよいのだが、それがすぐれた文学には現われている。文学の美しさとか喜びとかいうものは、それであると思うことがある。

すぐれたエッセイストとして知られた福原麟太郎さんは、「古典と人間の知恵」という随筆を、このように書きはじめている。

福原さんは、ギリシャの叙事詩『イリアッド』の冒頭が、総大将アガメムノンに愛人をとられたアキリーズが渚に座って青黒い波を眺めながら悲嘆にむせぶ場面からはじまることを例にあげて、そうした海を眺めてもの思いに沈むというようなことは、われわれの日常にもよくあることで、そうした瑣末なことがつと胸を刺し、古い昔の話が不思議に今のことと重なり、われわれの心に訴えるものだと述べ、そういうものをたくさん含んでいるのが「古典」なのだとわいている。

人びとの発する言葉、そのなかにこめられた人生の知恵、それを蓄積して今日まで貯蔵してきたのが「古典」であり、そうした意味で「古典」とは人類が営々として経験してきた永年の知恵の蓄積といつてよい。福原さんは、何百何千年の間、人間がそれを忘れずに伝えてきたということの意義を強調し、それは一人の人間の知恵や頼知では到底できないことで、まさに人類の叡知が「古典」というものになったのだと述べ、

古典を読む力を養っているということは、つまり人生の知恵を貴ぶことを知っており、その蓄積を楽しむ

盛者必衰のことわり——「祇園精舎」

美しい書き出しの一節

『平家物語』というと、誰しもすぐに頭に思い浮かべるのは、この書の巻頭に掲げられている序章「祇園精舎」の美しい一節であろう。

どんな作品でも、書き出しはひじょうに大切である。人びとの興味を喚起し、読者を物語の世界に誘い込む重要な導入部であることのほかに、作者がその作品の中で語ろうとしていることが、しばしばそこに示されているからである。

『平家物語』には、周知のように異本が多く、テキストによつて章段の出入りがあり、文章も大きく違つていゝる場合が少なくはないが、この一節は江戸時代に作られたごく一部の譜入り本を除いて、現存するほとんどすべての伝本の冒頭に据えられており、その内容もほとんど変わつていない。恐らくは、この物語のなりたちと深くかかわるものとして、当初から序章として位置づけられていたものと思われる。

そうした点から見てもこの冒頭の一文には、平家興亡という歴史的な大事件を物語として描き出そうとする作者の意図や姿勢がそこに込められているといつてよく、この物語を読み解きその文学的な世界を鑑賞するうえで、きわめて重要な手がかりであるということができよう。

では、まずその最初の一節から読んでみることにしよう。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝を問らふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これ等は皆旧主先皇の政にも従はず、樂しみを極め、諫をも思ひ入れず、天下の乱れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。近く本朝を窺ふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、これ等は驕れる事も猛き心も、皆執々なりしかども、間近くは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し、人の有様、伝へ承るこそ、心も言も及ばね。

祇園精舎の鐘の故事

「祇園精舎」というのは、中部インドのコーサラ国（舎衛國）にあった仏教の靈域。もとこの国の皇子であつたジェータ（祇陀）太子の所有の庭園で、「祇陀林樹園」、略して「祇園」と呼ばれていたが、釈尊に帰依したスタッタ（須達多）という大富豪がこれを買収し、そこに仏教の僧院や堂舎を造つて寄進した。このスタッタは慈悲の心が厚く、親のない子供や身寄りのない老人たちにつねに衣食を施したため、「給孤独長者」とよばれていたので、釈尊がこの二人の名前をとつてこれを「祇樹給孤独園」と名づけ、のち略して「祇園」とよばれるようになったといわれる。「精舎」は、サンスクリット語のヴィハラの訳で、「精進の堂舎」の意。僧たちが仏道を修業する靈場のことをいう。

この精舎の遺址は、二十世紀に入つてからの数度にわたる発掘調査によつて、現在の北インドのウツタル・プラデーシュ州の北部にあるサヘート・マヘートの地域であつたことが明らかにされた。釈尊は、その後半生の二